

## 西欧のエコビレッジ

糸長浩司

日本大学生物資源科学部教授

都市や農山村地域での自立的、自給的、循環的なエコロジカルでコンパクトな地域づくりの必要性に関して、その細胞となるような個々の生活者単位でのエコロジカルな暮らしづくり、エコロジカルな居住地形成のあり方を、「エコビレッジづくり」として考える。「環境と資源の安全保障」を個々の生活者の小さいまとまりの中で、サステナブルに創造していくかである。

都市では近隣住区レベル、農村地域では集落レベルということになる。このような既存の集住単位だけの生活環境をよりエコロジカルでサステナブルな形態に再構築するが緊急に求められている。日本には農村地域に現在、13.5万もの集落が存在し、この集落の維持は重要な課題であり、この集落再編、集落の再構築をエコビレッジをテーマとして取り組むことが重要となる。あわせて、先進的な人達による自主的な新しいエコロジカルなビレッジづくりも必要となっている。

### 世界でのエコビレッジ運動

世界的なエコビレッジづくりの国際交流とネットワークが、デンマークを中心に、90年代後半から始まっている。その中で理想的なエコビレッジとは、3つのエコロジー（生態系、社会・経済性、精神性のエコロジー）の実現を目指した、自立・完結・循環・持続型のビレッジとして定義されている。西洋近代社会での近代都市社会生活の病理や、農村地域の生態系、経済、コミュニティの変質と衰退の中での、都市住民達の田園地域に対する新しい挑戦である。

一方で、既存の農村住民が近代化での農村過疎化の中で、農村生活・文化の生き残りをかけて、果敢なコミュニティ活動、ツーリズム等の農村活性化の活動が、スカンジナビアでは「ビレッジ・コミッティ・アクション（集落委員会活動）」として活発に展開されていることも確かである。フィンランドでは3000以上の集落委員会活動が展開され、その全国的な連絡・指導組織も結成され、農村社会と経済の活性化に大きな役割をしており、EUの農村地域活性化戦略の中にこの手法は、「LEADER」政策として採用されてきている。都市住民達のエコビレッジ・アクションと既存農村住民のアクションが合致した形で展開されることがよりサステナブルな農村環境の形成につながっていく。



写真 パーマカルチャーデザインによる豪州最初のエコビレッジ、クリスタルウォーター

## コハウジングという新しいソーシャル・エコロジーの実践

コハウジングとは、集合住宅で個別の住宅の他に、コモン・リビング、コモンキッチン・ダイニング、大型洗濯機等がコモンルーム・棟にセットされ、週に何回かの共同の夕食をするというような暮らし型であり、働いて子育てをしている若夫婦や、老人の一人暮らしの人達にとっては、快適で、安全で、コンビニエンスな集住の魅力の場となっている。

この背景には、インナーシティでのコミュニティの崩壊や都市生活の安全性の問題、家族の崩壊等、西洋都市社会の問題に対して、新しいコミュニティの形をつくる、社会的な実験として60年代後半から始まっている。デンマークやスウェーデン等の北欧での都市住宅の一つの形態として定着してきている。

デンマークの第二都市オーフスの郊外の田園地域に12年前に建設された。建築事務所がプロモートして、人達を集め、約一年近くミーティングと計画づくりを共同で行い、建築は基本的には建築会社の施工で、多少の建築の仕上げ作業は住民が参加している。中心にコモンハウスがあり、その周りに二つのクラスターの住宅群で形成され、個々の中心にコートがあるり、正面に芝の運動場がある。開発後の管理運営は住民の自治組織で行い、集会は月に一回程度で、共同での食事は一週間に4回であり、5週間に一回の割合で当番が廻ってくる。コモンハウスは、一階のフロアがキッチンとダイニングで、中二階が会議とサロンの居間的な部屋であり、地下に幼児の遊び場と卓球台、アスレチックの部屋と音楽室、共同の洗濯室が用意されていた。

小さい子供持ちの家族には子育てにとってのメリットが高いという。従って、子供が大きくなった家族はコハウジングから出ていくこともある。最初の計画から参加者で現在まで居住している家族は全体の25%程度というから、定住率は高いわけではない。多少、コミュニケーション関係の煩わしさが指摘されていたが、北欧の日は長く、共食後私も参加したコミュニティの人達とのサッカーを遅くまで楽しんでいるところを見ると、楽しいコミュニティ生活とゆったりとした居住地での暮らしを感じる。



写真 デンマークのコハウジングの  
共同リビング風景



写真 デンマークのコハウジングの共食の風景

## スウェーデンの農のあるエコロジカル・コハウジング

郊外での相互扶助的な新しいコミュニティの形として発達してきたコハウジングも、建築手法にエコロジカル手法を取り入れたり、新鮮な野菜を食するための菜園の整備、糞尿や生活排水を自己処理するエコロジカルなシステムを取り組む、「農的風景のあるエコロジカル・コハウジング」の事例も増えてきている。

エコロジカル・コハウジングの事例はスウェーデンに見ることができる。その一つにスウェーデンの内陸の地方中心都市のヨンショッピング市の郊外に建設されたスメデンがある。郊外住宅地群のはずれの森をゆけると、赤い壁とレンガ色の屋根が目立つ木造住宅群が牧草の先に展開する。入り口に駐車場とゴミの分別回収の共同置き場、その先に24世帯用の2戸連の住宅が緩い曲線系で並び、奥にコモンハウスがあり、その横は、浄化処理の最終過程である浄化池がある。その周囲は、居住者用の農園となっている。コモンハウスの先は森林は行政管轄の保護区域である。住宅はパッシブソーラー、屋根での温水パネル、コンポストトイレでの大小の分離である。小水は、近くの農家が回収に年に2回程度くる。雑排水は敷地内での沈殿タンクを經由してた後、池で植物浄化した後、小川に流すシステムである。

土地は住民達の組合組織であるハウジング・アソシエーションの所有である。このプロジェクトは、1988年に環境系の政党からの提案で、市の音頭で計画づくりが始まる。1990年に、エコビレッジ・ソサエティーという組織を立ち上げ、地元の二人の建築家が参加して、美、エコ、健康に注目して計画づくりが始まる。都市に近くところで田舎的な暮らしを楽しむ。それに興味のある市民達が集まり、勉強会や先進事例地を見たりしている。最初は80家族が集まり協会に参加したのは32家族、最後まで残ったのは5家族で事業が始まったというから、決して順調なスタートではないが、現在は良好なエコロジカル・コハウジングとして形成されている。



写真 ヨンショッピング市エコビレッジ 写真 エコビレッジの下水処理システム  
デンマークでの草の根の手づくり型エコビレッジ運動

デンマークの環境団体・ガイヤトラストの主宰者のジャクソン夫婦達はデンマークでのコハウジング運動の先駆者であり、コハウジングづくりだけでは、自立性や、持久性、及びエコロジー性での限界に気づき、もっとサステナブルで、エコロジーなコミュニティづくりとしてエコビレッジづくりをデンマークの田園地域で実践を始め、その世界的なネットワーク形成を始めている。

デンマークでは、社会コミュニティ的テーマ、エコライフ的テーマ、精神的テーマでのオルタナティブな集住空間づくりを始めた人達が集まって、「サステナブル・コミュニティ・アソシエーション」を組織している。風力発電や植物浄化システム、ドーム型のエコ住宅で有名な初期開発でコハウジングの形式での住宅建設を進めているエコビレッジ・トールップ、大規模な有機農場経営を集団で行い生産物を市場出荷しているスパンフォルム、ハンディキャップの子供達との共生でその自立を促すエコビレッジ・ヘルサ等多様なエコビレッジが存在している。

トーラップは既存集落のはずれに開発されたが、現在も新しい住宅をストローベールや廃棄処分された貝殻等で建設中であり、既存集落の人達との共同利用の集会所も整備し、風力発電等のエコロジカル情報を提供する地域エコセンター（国策として全国に整備している）の役割も果たしており、エコビレッジと地域社会の融合が進んでいる。ここでの滞在中に数回の老人グループのビレッジ見学があり、独居老人達が若者達と田園環境の中でエコライフ的に集住する形態として注目されてきているようだ。



写真デンマークの最初のエコビレッジ、  
トーラップ。背後の風車はエコビレッジと  
近接する既存集落の人達が参加して建設  
した発電用風車



写真 トーラップでのリードベットのシステムの  
汚水処理システム

ヘルサはシュタイナーの理念に基づいて、精神薄弱児の人達と健常者が共に暮らすエコビレッジである。全体構想計画は、デンマークの環境建築家でパーマカルチャーリストのフロイト達と住民の共同作業であり、現在も整備中である。既存の集落のはずれに50エーカーほどの土地を取得し、住宅、障害者の居住棟、センター棟、畜舎、農場等が整備され、20程の作業グループが形成され、パン製作と販売、織物、バイオダイナミック農法でのファームिंग、ガーデニング等が、障害者も交えて行われている。



写真 ヘルサの風景



写真 ヘルサの計画図面

施設職員の給与は国から支給されているが、その他はヘルサの財団がまかなっており、この種の試みはヨーロッパで始めて10年間の討論の後にこのエコプロジェクトはスタートしている。近い将来は、芸術関係の人や、出版関係の人達も移住してきて、多様な仕事の場としても形成されていくという。昔のデンマークの農村集落での多様な暮らしの場が将来展開されるのではないか。

西欧の農村の現在は少数の大規模農家が分散し、農村としての等身大のコミュニティ形成は不可能に近い。近代的な農業経営の規模拡大の論理が、ヒューマンティのスケールを越えてしまっている中での、ヒューマンスケールでのコミュニティ形成は容易ではない。そんな非人間的な農村環境の中で、西欧でのエコビレッジづくりの試みは、田園環境、自然環境、そして、人間関係の新しい創造の試みであり、自分たちで創造する過程も生活の一部として楽しむ新しいコミュニティ創造である。しかし、色々な実験的な試みに果敢に挑戦し、それを評価し、発展させていくことのできる社会的コンセンサスと制度的な仕組みの自由さが北欧にはある。今、日本に必要なのは、市民レベルからのこの自由な発想での実践、実験的な試みを支援する環境条件、社会的コンセンサス、制度づくりである。

日本の集落形成とその維持の状況は、世界的にもサステナブル・ハビテーションの世界遺産に相当する価値をもっているのではないか。世界的なレベルでの民族間での交流が少なく、同一民族での地域形成が1500年以上も続き、また、特に、250年以上の長期の間、江戸時代という「安定」した地域社会形成の仕組みを形成できる時間があったことは、世界史的にも希有である。その意味で、かつて、サステナブル・コミュニティ、サステナブル・エコ・ハビテーションの時代を日本は、世界に先駆けて持っていたといえる。

その歴史的な遺産を活かして、日本の地域再生、エコビレッジ化をどう進めるのか、また、その担い手として、都市からの意識あるニューカマーをどう農村が開放的に受け入れるのが問われている。その制度的開発、新しい農村ビジョン、新しいサステナブル・ルーラル・コミュニティの形をどう形成するのか。そのための具体的で協同的な実践活動の場を農村地域はもっと提供していくべきであろう。既存の農村集落が、新しい血を入れたエコロジカル・ビレッジへの変身していくための大胆な施策と実験が求められている。グリーンツーリズム型の交流型むらづくりからエコロジカルな定住型のむらづくりへの展開が求められる。